

研究領域（V）教育課題

第11分科会 社会形成能力

研究課題 社会形成能力を育む教育の推進

視点

① 社会に貢献する資質能力・態度を育成する教育活動の創造

提案者 さいたま市立西原小学校長 柳 沼 勉

1 はじめに

小学生の児童にとって最も身近な社会は地域社会である。しかし、人間関係の希薄化、核家族化、就業構造の変化等により、児童が地域社会に対して能動的に関わる機会が減少しつつある。地域の諸機関、諸団体等で、子ども向けの様々な行事や催しを企画してくれているものの、それらに対する各家庭の関心の程度には大きな差異が存在する。したがって、学校の教育活動で意図的に関わる機会を設定しない限り、児童が地域社会をほとんど意識することなく生活することにもなりかねない。

児童にとって本来身近な社会であるはずの地域社会において、様々な人・もの・ことに関わることを通して、地域社会のよさや課題を知り、自分の考えをもったり何らかの行動を起こしたりする経験は、将来、社会の形成者として主体的に活躍するための資質や能力を育てることにつながると強く考える。

2 本校の概要

「人形のまち」として名高いさいたま市岩槻区（旧岩槻市）内の小学校14校中2番目に新しい学校で、開校39年目を迎えた。岩槻駅から北に徒歩15分程度の所に位置し、東北自動車道や国道122号線も学校のすぐ近くを通るなど、比較的交通の便がよい立地である。学区は集合住宅や戸建住宅が立ち並ぶ住宅地域であり、近年学区内に大規模な集合住宅が完成したこともあり、ここ数年間の児童数は700名前後で推移している。今年度は、通常学級21・特別支援学級2の合計23学級である。

住宅地域であることから、居住期間の比較的短い家庭が多く、地域社会においても相互の関わりを一層強固にすべく、新たなコミュニティの確立や取組が試行されている。そうした地域の諸機関及び諸団体は、学校の教育活動や児童の成長に対して大変好意的かつ協力的である。

本校児童には学力学習状況調査で数値化される学力面での課題はあるが、子どもらしい素直さを長所として、明るく伸び伸びと学校生活を送っている。どの学年においても児童相互が協力的に関わっており、入

院等による長期欠席児童はいるものの、昨年度に引き続き不登校児童は極めて少ない状態が続いている。

3 研究のねらいと課題

この研究では、小学校の教育活動において社会形成能力を育成し、社会の発展に貢献する資質・能力・態度を育む教育活動を推進する学校づくりに、校長としてどのように取り組むべきかについて具体的に明らかにしていく。

その際、児童にとって身近な地域社会に視点を当て、その人的・物的資源を活用した体験的学習や問題解決的学習に児童が積極的に取り組めるような学校づくりを目指す必要がある。そのためには、地域住民の学校教育への参画意識を高め、学校と地域がよい関係を保ちながら双方にとって価値ある活動を成立させることが重要である。

このように、小学校段階で身近な地域社会の現実や問題に触れる学習を経験することで、将来、より広い社会に目を向けて、積極的に社会に貢献しようとする態度や資質・能力を養うことが可能になると考える。それらを実現するために以下の2つの課題を設定した。

【課題1】地域で学ぶ・地域を学ぶ学校づくり

【課題2】地域の学習材（人・もの・こと）を生かす教育活動の実践

4 研究の概要

(1) 地域で学ぶ・地域を学ぶ学校づくりの推進

① 学校経営方針への位置づけ

児童の優れた点や地域の教育力を存分に生かした「特色ある学校づくり」「特色ある教育活動」の推進

ア 今年度の重点として

- ・生活科や総合的な学習の時間、教育課程外のチャレンジスクールでの地域学習及び地域体験学習等では、地域の教育力を積極的に活用し、児童の豊かな成長を育む機会として一層の連携を図る。
- ・人形教室や人形づくり体験等を通して、郷土岩槻の文化と伝統を深く広く知り、それらを大切に守っていかうとする郷土愛を育む。

イ グランドデザインへの明記

- ・「保護者や地域の方々との連携を大切にします」
(あいさつ運動, 人形教育, 食育の推進等)

② 教育課程の編成・実施・評価・改善

個々の教育活動については、学年が主体となり前年度の実践や申し送りを基本に取り組んでいる。学校として地域を生かした教育活動を意図的かつ継続的に実践していくためには、学年ごとの教育活動について共通理解を図ることが必須である。

1学年	通学路たんけん(生)・昔遊び(生)・創作人形作り(図)・人形集会(特)
2学年	町たんけん(生)・昔遊び(生)・創作人形作り(図)・人形集会(特)
3学年	人形見聞学(冊)・郷土資料見聞学(冊)・教員! 郷土人形(冊)・郷土人形作り(図)・人形集会(特)
4学年	消防署見学(社)・桐壱人形作り(図)・人形集会(特)
5学年	木目込み人形作り(余剰)・人形集会(特)
6学年	木目込み人形作り(余剰)・人形集会(特)

学校全体で取り組んでいる教育活動を表にまとめ、担任や担当者が変わっても確実に実践できるようにした。その上で、個々の教育活動が終了した時点で、計画や実践についての評価を行い、教育活動の質を高めていく。

(2) 教育活動に地域教材(人・もの・こと)を生かす

① 地域教材を活用した教育活動

ア 地域の「人」を生かす

3学年の総合的な学習の時間で「岩槻名人」として、様々な分野で活躍されている地域の方々に、その仕事ぶりや匠の技を見せていただいている。そして、それらの中から体験してみたいことを選択し、実際に体験する学習を実践している。この学習を通して『自分が住む街には、こんなに素敵な人がいる』ことを実感し、自分の街を一層好きになってほしいと考えている。



イ 地域の「もの」を生かす 表具師さんの匠の技を見る

2学年の生活科「町たんけん」では、学区内の様々な施設や商店、工場などを訪問させていただき、インタビューにもお答えいただいている。この学習により、日々何気なく見ているものについて深く知ることができている。

ウ 地域の「こと」を生かす

岩槻の産業といえば「人形作り」である。本校では、開校以来全学年の児童が発達の段階に応じた人

形作りに取り組んでいる。特に、高学年は地元人形店の伝統工芸士の指導のもとで木目込み作業を行い、全校児童による人形集会では人形組合の方から「岩槻人形」について教えていただく機会を設けている。そして、各学年の作品を地域の大きなイベントである「まちかど雛めぐり」に出品し、多くの方に見ていただいている。



人形の胴体に衣裳を木目込む

② 地域との関係の構築

教職員がその学校に勤務する期間は限られている。管理職や臨時的任用教員は、特にその期間が短い。そのような状況の中で、教育活動に地域教材を生かすためには、その基盤として学校と地域の間には良好な関係の構築が不可欠である。本校においては、学校地域連携コーディネーターが学校側の窓口になり、またチャレンジスクール教室コーディネーターを担ってくださる方がキーパーソンとして地域の窓口となり良好な関係が構築され、地域を生かした教育活動が年々充実している。

こうした関係を保ち発展させるために、校長には協力してくださる方に対する礼を尽くした対応が求められる。校長の姿勢や態度が次の活動に与える影響は計り知れない。

また、教育活動を充実させるにあたって、地域に関する様々な情報を収集する必要に迫られることがある。そのようなときに必要な情報を迅速に収集可能か否かは、日頃の「開かれた学校づくり」の進捗状況のパロメーターとしてとらえることができるのではないだろうか。

5 終わりに

児童は、溢れるほどの情報の中で生活しているにもかかわらず、関心のない情報には関わることなく生活することも可能である。であるからこそ、学校の教育活動の中で意図的計画的に地域の「人」「もの」「こと」に触れさせる価値は大きいと考える。

今後も学校の教育活動を通じて、地域で生活し、地域を愛し、地域に貢献できる児童の育成を図っていきたい。

研究領域（V）教育課題

第11分科会 社会形成能力

研究課題 社会形成能力を育む教育の推進

視点

② 豊かな未来の実現に貢献する力を育むキャリア教育の推進

提案者 東松山市立桜山小学校長 塩原憲孝

1 はじめに

日本経済団体連合会の「2016年度 新卒採用に関するアンケート調査」によると、企業の採用選考にあたって重要視した点の上位は、1位「コミュニケーション能力」、2位「主体性」、3位「協調性」であった。これらの能力は、現在、学校教育に求められている喫緊の課題でもある。子どもたちが、急激に変化する社会環境の中で、夢や希望をもち、自立的に未来を切り拓くためには変化に柔軟に対応できる力と態度を育てることが大切である。

次期学習指導要領には、新たに「キャリア教育の充実」が盛り込まれた。学校教育が社会と密接なつながりをもつことで社会的・職業的自立に向けて必要な資質・能力を身に付け、子どもたちが将来直面するであろうさまざまな課題を乗り越える力を育てることができる。

2 本校の概要

本校は、東松山市南部の緑豊かで閑静な住宅街、高坂ニュータウンの中にある学校である。近くには、関越自動車道、こども動物自然公園、大東文化大学や東京電機大学があり自然にも恵まれている。

昭和59年4月に旧桜山小学校が開校したが、平成18年4月より、緑山小学校と統合し、新生桜山小として新たにスタートし、今年で12年目となる。児童数は271名で、学級数は通常学級が12学級と特別支援学級が2学級である。

平成28年度から「小中連携教育特認校制度」により、市内のどこからでも本校に転入学できるようになった。また、平成28年度から市教委より白山中学校との「小中連携事業」の委嘱を受け、2年目となる。児童だけでなく教職員、保護者の交流も盛んに行われている。

3 研究のねらい

本校の学校教育目標は、①夢を持ち楽しく学ぶ子②心豊かに思いやる子③健康でたくましい子である。また、児童が主体的に学び、将来に夢や希望をもち、「絆」を大切にした集団活動を学校経営方針にも加えた。

本校では、平成28年度より「小中連携事業」を推進しており、小中9年間をとおしての学びと育ち

の連続性を重視した共通の児童・生徒像として「夢や志を持った、調和のとれた児童・生徒の育成」を掲げている。

本校の児童は、全員が白山中学校へ入学する。9年間、固定化された人間関係の中で学校生活を送っていることで、互いに理解し合い教育活動を行うことができる利点もあるが、関係が崩れると修復が困難な面もある。

そのような状況の中で、社会と積極的に関わり、将来を真剣に考え夢や希望をもった児童の育成に向けて「キャリア教育」の視点から全教育活動を見直し、その位置づけの明確化、体系化を図った。

〈社会形成能力の育成のための重点〉

- (1) 児童が他者との関わりの中で、自分を表現する力の育成
- (2) 地域の教育力を生かした教育活動の推進
- (3) 体験的な活動による集団活動における自分の役割と他者との協働

上記の(1)～(3)本年度の「キャリア教育」の重点とし、以下のような取組を行っている。

4 具体的な取組

- (1) 「学級会」を核とした話し合い活動

集団の中で、他者の立場や多様な考え、自分の意見、思いを伝えるとともに、他者と協力・協働して学級への参画意識を高めることは重要である。

本校では、全学年で「学級会」を計画的に実施している。計画委員会で議題を選定し、話し合いの流れの例を示すことで、児童一人一人が自分の考え、意見をもち、円滑な話し合いが行えるよう、指導に一貫性をもたせるための研修も行っている。

学級会を重ねるごとに、他者の意見を聴き、自分の言葉で考えや意見を表現する力、自信をもって役割を果たし、他者と協力する態度の育成を図ることができている。

- (2) 地域の教育力を生かした取組



学級会の進め方



学級会の様子(5年生)

身近な人々の職業に触れ、多様な人との関わりを経験することは、キャリア発達を促す上でも非常に有効である。校区内には、学校教育に理解を示してくれる人が多くとても協力的である。また、地域の一員として何ができるか、将来の夢や希望をもち、実現しようと努力する態度の育成にも大きく貢献している。

① 地域で働く人々を知る町探検

2学年の児童が校区内にあるスーパーマーケットや郵便局、交番、和菓子店等を訪問し、自分たちの生活とのかかわりに気づくとともに、身近な人々との触れ合いをとおしてさまざまな職業に触れるよい機会となっている。3学年では、社会科で「店ではたらく人」の単元でさらに詳しく学習している。

② 地域の教育力の活用

ア 4学年では、毎年地域で働く人々を学校にゲストティーチャーとして招聘している。昨年度は、「地域を守るおまわりさん」



ゲストティーチャー（警察官）

として仕事に対する誇りや使命感、地域の安全を守る重要な役目等について説明していただいた。

イ 6学年では、毎年近隣の老人介護施設への訪問を行っている。新興住宅地であるため、核家族の家庭が少なくない。高齢者との触れ合い、交流をとおして自分たちが社会の一員として何をすべきか、どのようなことで社会に貢献できるかを考える機会としている。施設の見学だけでなく、高齢者と積極的に関わることで、人との触れ合いを体験できている。

(3) 6学年においてキャリア教育の集大成として「スペシャリストに学ぶ」～夢

に向かって～というテーマのもとに、①仕事の意義、働くことの意味について学習している。ハローワーク



スペシャリストにきく

東松山から講師を招き、「夢」「社会人」をテーマに「大人になって働くことの意義」についての講義、社会人になるための準備等自分たちで意見を出し合いながら夢や希望を抱かせる学習となっている。

また、実際に働いている方を招き、「スペシャリストにきく」学習を行っている。昨年度は、パティシエ、元プロボクサーの方に講師をお願いした。実際にケーキづくりに触れ、困難や苦勞、仕事をしているときの感動や喜びを聞くことで働くことへの興味・関心が高まり、自分たちの将来を考える一助となっている。

(4) 白山中学校との小中連携事業

9年間の学びと育ちの連続性を重視した取組によ

り、中学への期待が膨らみ、不安の払拭にもつながっている。主な取組としては、

① 学校行事をとおしての交流

白山中学校体育祭へ全児童が参加している。競技や応援を中学生とともにに行い、交流することで中学校の行事を体験している。また、本校の運動会の競技にも中学生が参加しており、中学への憧れを抱く児童も少なくない。他にも中学校の立志式の参観をとおして中学生が立派に語る夢を聞くことで、自分たちの将来を真剣に考える機会となっている。



白山中体育祭への参加

② 部活動への参加をとおしての交流

6年生にとって部活動への期待は大きい。年間をとおして希望する部活動へ参加する機会を設け、中学生とともに活動している。

(5) その他の活動

〈縦割り活動による異学年間の交流活動〉

本校では、児童会活動としての「縦割り活動」を行っている。8つの活動班による集団活動をとおして自分たちで考え、教え合い、協力することの大切さを学ぶことにより、人間関係の育成に大きく寄与している。また、リーダーシップやフォローシップの体験により、尊敬や憧れ、指導力や思いやりの心の醸成を図っている。主な活動は、縦割り遊び、スタンプラリー集会、なかよし遠足、運動会等である。



縦割り活動の記録

5 成果と今後の課題

当初は、遠慮がちな発表、発言であった学級会が次第に自信に満ちた話し合い活動に変わりつつある。今後も全学年が計画的に話し合い活動を進め、さまざまな活動の中で、自分の言葉で表現できる力を養いたい。また、地域の協力を得た体験活動、地域の方々と触れあう機会を設けたことで、地域の一員としての自覚が芽生え、地域の行事への参加により地域へ協力しようとする姿が見られてきた。

地域との連携には、綿密な事前打合せのもとに最大の教育効果をあげる必要がある。そのために積極的に校長が地域と関わり、学校へ惜しみない協力・支援を求めていきたい。

今後も本校へのさらなる地域からの協力と支援をお願いしていきたい。

研究領域（V） 教育課題

第12分科会 自立と共生

研究課題 自立と共生を図り実践的態度を育む教育の推進

視点

① 子どもの自立を図る特別支援教育の推進

提案者 さいたま市立針ヶ谷小学校長 坪井政彦

1 はじめに

さいたま市では、平成29年度の教育行政方針の中で、「社会を生き抜く力をはぐくみ、多様な個性が生かされる教育の推進」を目標の一つに掲げている。急速に変化する現代社会において、学校教育は子どもたちに、主体的に判断し、自立した人間として社会を生き抜いていく力をはぐくまなければならない。また、これからの社会では、一人ひとりの多様な個性が生かされ、協働の中で新たなものが創造されていくことが望まれている。そのような未来に向けては、まさに「自立と共生を図り実践的態度を育む教育の推進」は重要な教育の課題である。

2 本校の概要

本校は、来年度には開校60周年の節目を迎える。与野駅と北浦和駅の間、中山道と産業道路の間に位置し、古くからの住宅と新興マンションからなる住宅街の中にあるが、学校は緑が多く良い教育環境にある。保護者・地域の方々は学校に愛着をもってくださっており、大変協力的である。

今年度は全校児童573名、昨年度より1学級増の21学級（うち特別支援学級2学級）でスタートした。

学校教育目標の「豊かな心をもち、たくましく生きる児童を育成する」ことを目指し、「ともに伸びよう」を日々の実践の合言葉にし、児童、教職員、保護者、地域が、協力し合い励んでいる。

3 研究のねらいと課題

本校には、特別支援学級が2学級（知的障害のクラスが1、自閉・情緒障害のクラスが1）ある。また、通常学級にも配慮を要する児童が在籍している。自立と共生を図る教育の推進は、ますます重要である。特別な配慮を必要とする子どもの自立を進めるためには、以下の点が重要であると考えます。

課題1 教職員の共通理解や指導体制の充実

課題2 授業のユニバーサルデザイン、合理的配慮

課題3 自立と共生の実践的態度を育む教育活動

4 研究の概要

(1) 課題1 教職員の共通理解や指導体制の充実

① 常設2委員会の充実 ケース会議

本校では、特別支援部会と生徒指導・教育相談部会の2委員会で児童の指導・支援にあたる体制をとっている。特別な配慮を必要とする児童については、学校生活や学習によりよく取り組めるように、特別

支援部会で情報交換、共通理解を図っている。また必要に応じてスクールカウンセラー等が入っているケース会議も行っている。

② さいたま市特別支援ネットワーク連携協議会の活用

本校では、特別支援学級や通常学級において特別な支援を要する状況の児童について、特別支援学校のコーディネーターと指導1課特別支援担当指導主事に来校いただき、当該児童の授業参観と協議を行い、一人ひとりに応じた指導・支援に役立てている。

③ 市教委関係機関との連携

ア 就学前から家庭で既に相談していた場合や、就学してから相談した場合とがあるが、児童療育センターさくら草や障害児総合療育施設（通称ひまわり学園）等と連携し、情報を共有し指導・支援に生かしている。

イ 通級指導教室や適応指導教室の活用を行い、現在は、難聴・言語障害（ことばの教室）に3名、発達障害・情緒障害通級指導教室（かがやき教室）に1名、適応指導教室（あおぞら）に1名が在籍し、指導を受け効果をあげている。

④ 保護者との教育相談、就学相談

連絡帳を通じた連絡や登下校の送り迎えに来る際などに機会を捉えて話をするをきめ細かく行っている他、特に特別支援学級6年生の保護者には面談を設定して、進学先等についての相談をするなど、普段の指導に生かす情報交換だけでなく、将来を見据えた指導を心掛けている。

(2) 課題2 ユニバーサルデザイン、合理的配慮

学校生活や授業において、子どもが不都合を感じないように、またできるだけ多くの子に分かりやすくして意欲をもたせるため、次のような配慮を行っている。

① ユニバーサルデザイン

通常学級に在籍する多動や自閉傾向のある児童や、特別支援学級に在籍する児童に落ち着きや見通しをもたせるために、次のような対応を取っている。

- ・学級文庫など興味をひいてしまうものの柵にカーテンをかけている。
- ・分かりやすい掲示を心掛けている。



- ・特別支援学級では、今日の予定が分かるようにホワイトボードで示している。また、当番の児童を示し、顔写真も入れ、自己存在感を感じさせ、意欲を喚起している。



② 合理的配慮

集団での学習参加に困難がある児童に対して、次のような配慮をしている。

- ・家庭より持ち込んでいる電動車いすの他に、通常の車いすを併用し、教室移動等にも対応している。
- ・カーテンで仕切った学習スペースを教室の一面に設置し、音に敏感で落ち着きなくなる児童の学習スペースや、パニックを起こした児童のクールダウンの場所に活用している。



(3) 課題3 自立と共生を育む教育活動

自立と共生に向けた実践的態度を育むには、まず子どもたちに生きて働く確かな学力を育み、生きる力の育成を図ることが重要である。また、子どもたち自身の自己存在感・肯定感の向上や意欲の向上が、自立と共生に向かう力を生むと考える。そのためには、自分の責任を果たしていく活動や協力して行う活動を通して、子どもたちのやる気を喚起し、活動を通して達成感をもたせていくことが大切である。特別支援学級では、次のような実践を行っている。

① 確かな学力の育成

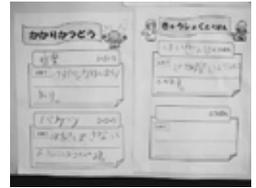
- ・少人数指導の充実を図ることで、一人ひとりの学力の向上に努めている。現在特別支援学級は2学級で担任が2人であるが、算数や国語の学習において少人数指導加配教員とスクールアシスタントが入る体制で、一人ひとりの学力向上に向けて個別学習、レベル別教材の充実を図っている。

② 自立と共生に向けた教育活動

- ・1日の学習予定表を活用し、1日の予定を記入させ、見通しをもたせて学習に取り組めるようにしている。また、個人の目標を記入したシートを学級内に掲示し、めあてをもたせている。
- ・日直や係活動、当番活動について、自覚をもたせて取り組ませるようにしている。1日の予定が分かるようにしたホワイトボードには、その日の日直や当番が誰であるか分かるように表示しているが、活動を支援しながら、できたことを称賛し意



欲を高めている。また、各係や当番の仕事は、教室掲示にして、児童の自覚と責任を高めるようにしている。清掃に関しても、児童一人ひとりの分担をはっきりさせ、しっかり取り組ませることで、責任をもって仕事に当たる経験を学ぶとともに、達成度も掲示で表し、達成感と意欲を喚起している。



- ・交流及び共同学習を推進し、特別支援学級の児童と通常学級の児童との交流を促進している。現在特別支援学級の児童は全員、それぞれの児童に応じて複数の教科で、交流学級での授業に参加している。また、集会の活動や縦割りの活動でも、通常学級の児童とともに活動に参加している。一方、通常学級に在籍し特別に支援が必要な状況の児童が、特別支援学級で学習の補充を行うことしており、双方で効果をあげている。
- ・自然の教室、校外学習等においても、交流を推進しており、昨年のたかつえ自然の教室では特別支援学級の児童も通常学級の児童とともに活動と一緒にいき、今年度の自然の教室では、部屋での生活や就寝も一緒に行うことができた。本校にとっては今年度初めて在籍者がいる6年生が、これから修学旅行に参加することになるので、こちらも交流をさらに推進したいと考えている。

5 まとめ

研究課題である「自立と共生を図り実践的態度を育む教育の推進～子どもの自立を図る特別支援教育の推進～」を押し進めていくには、特別支援学級における指導・支援はもちろんのこと、通常学級における課題も含めて、広い視野で組織的に推進していくことが重要になる。校長の役目として、必要な指導・支援を展開していくため、校内の組織体制を整え、また対外的な関係機関等との連携を推進することが重要である。また、そのためには教職員の人員の配置や学校の施設設備の対応も必要であり、今年度は比較的整備できたと考えているが、来年度以降も維持・発展できるかは課題でもある。

研究領域（V）教育課題

第12分科会 自立と共生

研究課題 自立と共生を図り実践的態度を育む教育の推進

視点

② 心結ぶ未来社会の実現に向けた環境教育等の推進

提案者 幸手市立幸手小学校長 安藤 康 浩

1 はじめに

7月の全校朝会講話で、「ハチドリのひとつくいま、私にできること」（監修・辻 信一 発行・光文社）という17行の物語を読み聞かせ、続き話を全員に書かせる取組を行った。教育実習生が研究授業をした説明文に登場したことや5年生が総合的な学習で環境についての学習を進めていたことから、学習の一助となればと考えたからである。

今日、地球上には環境破壊につながる様々な問題が生じており、環境問題に対して緊急に対処しなければならないという意識が高まっている。一人一人が人と環境について理解を深め、豊かな自然等の価値についての認識を高め、環境を大切にすることを、環境に配慮した生活や責任ある行動をとること、また、環境問題を引き起こしている社会経済の背景や仕組みを理解することにより、社会経済の構造を環境に配慮した持続可能なものへと変革していく努力が求められている。学校では、地域の特色を生かし、環境への理解を深め、環境を大切にすることを育成し、主体的に行動できる態度や資質、能力の育成を図る必要がある。

2 本校の概要

本市は、豊かな自然と先人たちの英知に支えられ、古くは日光街道と日光御成街道が合流し、さらに筑波道が分岐する宿場町として栄えた歴史を持つ。また、関東の桜の名所として名高い権現堂堤では、四季折々の花が見られる。さらに、昨年は市制施行30周年を迎え、「都市と自然が調和した 安全・安心で活力あるまち」づくりが進められている。

本校は、幸手市の中心部に位置し、創立145年の歴史を誇る伝統校である。学区は東武日光線と国道4号線の間にあり、宿場町の名残をとどめる商店街と住宅が立ち並び、自然を感じる事が少ない地域である。しかし、地域の方々の学校教育への関心は高く、3世代が本校出身という家庭も多い。

3 学校経営における環境教育の位置づけ

本校は、「自ら学ぶ子」を総括目標に掲げ、環境教育全体計画に指導の重点「地球環境に親しみ、地球環境問題に興味・関心を持たせる（環境からの学び）」「身近な環境問題に気付き環境を守ろうとする心と態度を育てる（環境の中での学び）」「動物・植物を愛し、生命を尊重させる（環境のための学び）」の3項目を位置づけ、児童の発達の段階を考慮しつつ、各教科・領域等との連携を図り、多様な体験的活動を通して実践的態度の育成を目指している。

4 実践の概要

(1) 教科・領域等との関連を図った取組

自然環境を大切にしようとする児童の意識と意欲を育てるためには、身近な環境問題に関心をもたせ、問題を見出し、考え、判断し、よりよい環境づくりや環境の保全に主体的に取り組む態度と能力を育成することが大切である。そのために、本校では総合的な学習の時間を中心に各教科、道徳、特別活動などとの関連を図った環境教育を実施している。

① 総合的な学習の時間での取組

3年生：「発見、たんけん、幸手じまん」

学校の周りを探検し、自分たちの住む地域の豊かさを見直すことができることを目標に学習を進めている。現地に行き権現堂桜堤保存会の方に話を伺うとともに、魚の放流体験を実施した。児童は、身近な自然を再認識するとともに環境を守るための工夫や苦勞について学び、地域の自然を守るために自分たち



ができることを考えることができた。

② 道徳の時間での取組

1年生：しぜんをたいせつに「たすけて」
(みんなのどうとく 学研教育みらい発行)

本資料は、せみの幼虫たちが脱皮しよう木に登り始めたとき、子どもたちに見つかつて、木から摘まみとられてしまうが、男の子の「逃がしてやろう」との発言から幼虫は仲間のところへ戻れたという内容である。せみの幼虫の気持ちを考えたり、男の子の気持ちを考えたりすることで、自然を大切にすることはどういうことなのかに気付くことができた。

(2) 多様な体験的活動を通じた取組

環境問題を学ぶにあたり、児童が自分は被害者であると同時に加害者にもなり得るという認識をもって、環境に配慮した循環型の生活に転換することの大切さに気付くことが必要である。また、環境問題は、児童の日常生活と密接な関係にあることから、体験的な活動を重視し、問題解決的な学習や実践的な活動に取り組む必要がある。そのため、本校では栽培活動や学校に設置されているビオトープを活用した活動を実施している。

① 環境緑化のための栽培活動

本校では、
飼育委員会
(美化栽培含)
の児童が、学
校応援団の
方々の協力を



得て、プランター栽培を行っている。今年のテーマは、「笑顔いっぱい」とし、50個のプランターにミニヒマワリの種を植えて、育てている。プランターを学校の各所に置き、ヒマワリの花のように笑顔いっぱいにしたいと活動している。植物を育てることで、生長を実感し、自然を大事にしようとする実践的な態度が育っている。

② ビオトープの活用(総合的な学習の時間)

4年生：「自然の中で学ぼう」

ビオトープや学校周辺の自然を探検し、身近

な植物、昆虫などについて興味を持ち、その特徴や生態について調べ、人と自然が共存していくための方法を考えることを目標に学習を進めている。毎年、導入段階でNPO法人幸手市民環境ネットの方々(ビオトープの管理もしていただいている)をゲストティーチャーにお招きし、学校周辺の自然環境について実物を使ってご講話いただいている。児童は、身近な自然の有り様を理解し、講話で得た基礎知識をもとに学習を続けている。



③ 家庭・地域との連携による取組

保護者・地域にも環境に対する実践力の育成を目指し、PTAとの連携を通してエコ活動の参加を呼び掛けている。これらの活動を児童が見たり、手伝ったりすることで、家庭や地域にも環境問題解決の一助となったり、児童の実践的な態度が育つものと考えられる。

- ・アルミ缶回収(月1回)
- ・ペットボトルキャップ回収(随時)
- ・エコライフデーへの参加(年2回)

5 おわりに

市民環境ネットの本田さんは、我々教職員に「学力重視に大きく傾いた学校教育の中で環境学習がおざなりにされているのでは？」と事あるごとに語られます。

児童の豊かな感性を磨くためには、校長自らが謙虚に耳を傾け、その上で、児童と一緒に感動を味わうことこそが大切である。今後も教職員と共通理解のもと、家庭・地域とも連携を蜜にし、持続可能な社会の構築を目指した環境教育の充実を図っていく。

研究領域（V）教育課程

第13分科会 連携・接続

研究課題 家庭・地域等との連携と異校種間の接続の推進

視点

① 家庭・地域等と連携した開かれた学校づくりの推進

提案者 八潮市立八條小学校長 會 沢 実

1 はじめに

新学習指導要領に基づいた教育課程が、小学校は平成32年度、中学校では平成33年度から全面实施される。その改訂の背景には、グローバル化の進展、生産年齢人口の減少、絶え間のない技術革新などにより「今の子ども達の約65%は大学卒業後に現在は存在しない職業に就き、今後10年から20年で約半分の仕事が自動化される。」と予測され、未来社会を生き抜く子供たちは、想像を絶する「厳しい挑戦の時代」を迎えることが挙げられている。

そのような時代において、学校教育は、子供たちに「生きる力」を育成することが求められている。その目的を達成するためには、家庭や地域の方々とともに子供を育てていくという視点に立ち、家庭、地域社会との連携を深め、学校内外を通じた子供の生活の充実と活性化を図ることが重要である。

2 地域と学校の概要

八潮市は、「学力・体力の向上と豊かな心の育成」を目指し、小中一貫教育を導入して12年目を迎えた。市内中学校1校と小学校2校を1ブロックとして、合計5ブロックで構成されている。「9年間の学びを結ぶ」ことについての教職員の意識が高まり、基礎学力の定着や不登校児童生徒、非行問題行動の減少等に一定の成果が見られるようになった。

本校は、八條中ブロックに所属し、八條北小と八條中と連携しながら「隣接型」と「分離型」の小中一貫教育を推進している。また、本ブロックは、八潮市の北部に位置し、人口増加の見込みがない小・中規模の学校である。3世代の家族が多く、学校教育への理解があり、協力的な家庭が比較的多い地域である。

以下、家庭・地域と連携した開かれた学校づくりの実践について、八潮市と八條中ブロック、本校の取組について述べる。

3 家庭・地域と連携した開かれた学校づくりの実践

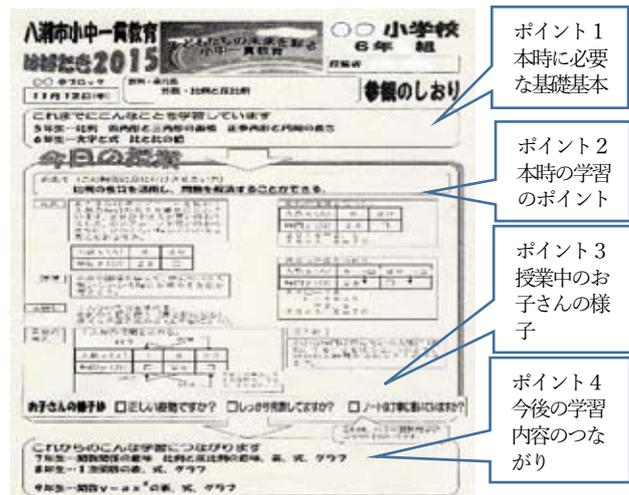
(1) 教育活動の公開等で進める開かれた学校づくり

① はばたき〇〇〇〇授業公開

学校公開のメリットは、学校教育に対する保護者や地域の理解を深めることができることである。

八潮市は、学期ごとの定例の授業参観とは別に年1回「はばたき〇〇〇〇授業公開」として、対象を保護者だけでなく、地域の民生委員や登下校ボランティアの方々等、学校外で子供と深く関わっている方々にも参観していただき、小中一貫教育の理解と学校との信頼関係の構築に努めている。

参観の際に、今までの学習や今後の学習、また、当日の授業がどのような内容なのか一目でわかる「参観のしおり」を作成し配布することで、授業の内容が明確に理解できるように工夫している。



また、授業公開後は、必ず授業についてのアンケートを実施し、その結果を広報するとともに、教員の授業改善の貴重な意見としている。

③ 八潮市小中一貫教育合同報告会

毎年2月に全市をあげて小中一貫教育の進捗状況と成果・課題についての報告会を実施している。参加対象者は、市議会議員、学校評議員、民生・児童委員、社会教育団体、各種ボランティア団体等である。毎年200名程度の参加があり、学校と家庭、地域が一体となって子供を育てる機運を醸成している。

(2) 地域の特性を活かした開かれた学校づくり

○ 八條中ブロックの学校を支える応援団

〈平成29年3月調査〉

- ・学校応援コーディネーター各校1名ずつ配置
現PTA会長(八條小), 学校評議員(八條北小)
元教員(八條中)
- ・年間活動回数(3校の合計)

安心・安全確保への支援	……………	435回
学習活動への支援	……………	120回
学校の環境整備への支援	……………	22回
学校ファームへの支援	……………	14回
体験活動への支援	……………	5回
- ・活動が実施された実日数の平均 ……149日
- ・3校とも、活動中「いじめ」の兆候が見られたら、速やかに学校に報告するように依頼している。
- ・「いじめ防止基本方針」に、学校応援団による協力等に関する記載があるのは1校だけである。
- ・学校支援ボランティアに携わる実人数の平均は42人。固定された方なので、コーディネーターの指示が通りやすく、円滑な活動ができています。そのため、子供たちへの教育効果は大きい。子供たちは、感謝の気持ちを手紙等へ書き、学校全体で「感謝の会」を開催している。
- ・学校と応援団の双方向での連携により、子供に社会性が育まれてきた。今後は、新たな人材の確保と八條中ブロック内でのボランティアの有効活用を図っていく。

(3) 保護者・地域との情報共有による開かれた学校づくり

① 学校理解のための「情報の共有化」

学校が抱える課題や問題は複雑化・多様化しており、学校の努力だけではその解決は困難となってきた。また、学校のよさや特色は、保護者・地域住民から認められて初めて輝きを増す。保護者・地域住民と連携・協働して学校の課題解決に取り組むことで、その効果は大きくなる。

ア 3校合同学校保健委員会

子供の健康に関する課題を共有テーマにすることで、学校と家庭が連携して、その解決のための知識と方策について学ぶ。(過去2年間のテーマ)

- ・「わくわくミルク教室」一般法人 日本乳業協会
牛乳を飲む大切さとその働き。バター作り。
- ・「おなか元気教室」埼玉東部ヤクルト販売株式会社
乳酸菌の働きとよいウンチを出すための生活習慣。

イ 学校評議員会から学校運営協議会の導入へ

八潮市は、本年度より学校運営協議会の制度・概要について市内全小・中学校に周知し、来年度から

コミュニティスクールの指定を行う予定である。

① 信頼形成のための「情報の共有化」

学校の重点目標や具体的取組は、年度当初だけでなく、継続的に情報発信している。また、授業参観後の「保護者による授業評価アンケート」の結果や家庭学習・学習習慣の重要性についても情報発信することで、保護者が学校と課題を共有することに繋がり、学力向上が図られている。八條中ブロックは、八條中の定期テスト期間に合わせて、小学校も同時に家庭学習週間を設定して取り組んでいる。

② 学校だより等による情報提供

学校だよりや学年だより、その他各種たよりを定期的に発行し、保護者・地域住民へ配布している。また、ホームページの更新を随時行い、アクセス数が増加している。今後は、提供した情報に対する感想や意見を求め、教育活動の改善に役立てていきたい。

③ 地域住民への情報提供

保護者に比べ、地域住民に対する情報提供の機会は多くない。地域の行事や地域のボランティア活動に子供たちや教職員を参加させたりする等、学校が地域に貢献することで、学校への理解と連携・協働の関係が一層強固になれるように努めている。

4 おわりに

開かれた学校づくりの推進は、「地域の望む子供像の実現」「地域の教育力の向上」「地域コミュニティの形成」等の成果が期待できる。しかし、実践を振り返り、様々な取組の中で、担当者だけの取組になっている場合や学校と地域の双方が成果を実感できていない等、地域との組織的、継続的な結びつきが十分でない場合もあった。

家庭・地域等と連携した開かれた学校づくりをさらに推進していくために、学校と地域等がそれぞれの思いや願いを十分に話し合っ共有し、学校と地域等が「対等互惠」の関係を保ちながら取り組んでいくことが重要であると再認識できた。今後も、子供の「生きる力」の育成に向けて、地域とともに歩んでいきたい。

研究領域 (V) 教育課題

第13分科会 連携・接続

研究課題 家庭・地域との連携と異校種間の接続の推進

視点

② 異校種間の学びの連続性を重視した取組の推進

提案者 桶川市立桶川西小学校長 森 田 晋

1 はじめに

小学校から中学校、中学校から高等学校などの学校間の移行には連続性があり、学校種間の円滑な連携・接続を図ることが重要である。これまで学校間連携の取組が不十分であったことにより、生徒個々のもつ不確かな情報や、教師の教え方、生徒への接し方のギャップなどから起こるとされる進学時の不適応（いわゆる「中1ギャップ」や高校1年生の中途退学者の問題）など、見過ごすことのできない問題が生じている。学校間の連携は、このような課題を解決する上でも重要なものである。学校は、異なる学校種の活動についての理解を深め、その理解を前提とした系統性のある指導計画を作成することが重要である。また、子供一人一人の発達の状況を的確に把握し、それに対するきめ細やかな支援を行うためには、子供の発達に関する情報を次の学校段階に引き継いでいくことが必要である。

2 本校の概要

本校は、昭和43年4月1日開校で、今年ちょうど50周年を迎える学校である。一時期は、児童数が2,000人を超え、県内で一番大きい小学校となったことも



あるが、現在は、全校児童700人と各学年110～130名、3クラス、4クラスの学校である。また、開校時、校舎を作る際に縄文時代の遺跡である高井遺跡が発見され、その遺跡の上に建つ学校であり、校章も縄文土器をデザインしたものである。開校時は、学校の周りには武蔵野の雑木林が広がっていたようであるが、現在では雑木林が住宅地となり、住宅地の中の学校となっている。

本校児童の多くは地元の公立中学校へ進学するが、進学先は桶川中学校と桶川西中学校の2校で、

例年ほぼ3:2の割合で桶川中学校のほうが多い。このように進学先が別れてしまうことによって、小中の連携が難しくなり、現在まで課題も多い。

3 異校種間での連携の実際

進学先の中学校が2校に分かれてしまうことによる課題の多い小・中の連携ではあるが、小・中で子供だけでなく、教員についても連携していく必要があり、多くはないが本校においてもこれまでいくつか取り組んできた。小中の連携を中心にいくつか取り上げてみる。

(1) 桶川西中学校生徒会によるあいさつ運動

桶川西中学校に進学した卒業生を中心に学期に1回朝、中学生が桶川西小学校にやってくるあいさつ運動



を行っている。当日は、本校児童会も合わせてあいさつ運動を行い、立派になった卒業生とともに西小児童、そして教師も一緒に大きな声であいさつを行っている。

(2) 桶川中学校3年生による歌声交流会

もう一つの進学先である、桶川中学校3年生との10月の合唱の交流である。中学校はこの後校内音楽会があり、それに向け



て放課後各クラスで練習に取り組んでいる。その成果を6年生の前で発表し、6年生も合唱を披露する。あいさつ運動とともに中学3年生の姿、歌声に感動することができ、小学生にとっては今後の目標を持つことができるよい機会となっている。

(3) 中学校授業体験会

桶川中学校においては、夏休みに小学生を対象に英語、理科の授業体験、そして希望部活動の体験を行っている。また、桶川西中学校においては、今年度3月に小学校に教員が来て中学校の授業を行う予定である。小学校の3月は、卒業式の練習等で落ち着かない児童もいるが、中学校の授業を体験することによって、これからの目標を持たせることができると考えている。

また、子供たちの中には中学校では授業が変わる、難しくなるのではないかと不安に思っている児童もいるので、その不安解消になると考えられる体験の一つである。

(4) 中学校社会体験事業

桶川市内中学校で行っている3日間の社会体験チャレンジ事業の一つの受け入れ先として行っている。中学生が主に低学年のクラスに配置され、担任の補助をし、小学校の担任の体験を行っている。

(5) 中学校訪問見学会、教員の小・中合同研修会

桶川市には、進学先中学校が複数ある小学校が何校もあり、ここがネックとなって小中の連携が難しくなっていた。今年度、桶川市では夏休みに一斉に、小・中の合同研修会を行う予定である。今年度は中学校区を単位として中学校で行い、いくつかのテーマに分かれて小学校、中学校でのそれぞれの指導について話し合う。

また、本校では学校が分かれてしまうためできなかった、中学校訪問を市内で同一の日に設定して、3学期に行う予定である。小学生が進学予定の中学校を訪問して、授業を見学したり、部活動の見学、体験したりする。小・中の連携においてこの学区が分かれてしまう問題は大きいですが、校長同士が連携して市内で同一日に設定し、行うことができた。

(6) 3月の小・中連絡会

小学校から中学校へのいわゆる配慮をする児童の連絡会である。現在は、小学校の卒業式後に行っている。

(7) 桶川西高校との連携

桶川西高校の水族館で、さけを卵から稚魚

に育てている。その卵の一部を本校に持ってきてくれて、世話を桶川西高校の生徒が本校まで来て行っている。放課後となってしまうので、児童と直接会うことは少ないが、子供たちは西高のさけとして、孵化するのを楽しみによく観察をしている。

また、書道の大家である前桶川西高校の校長先生にも本校に来てもらい、書初めの指導をしていただいた。



4 おわりに

桶川市においては、市教研の授業研究会等が小・中合同で行われているため、それぞれの授業を見る機会が多い。また、だいぶ前ではあるが、教員がそれぞれの中学校区内で互いの学校の授業を見合うなどのことをしていた。他にも、小学校の卒業式後に中学校において半日体験入学なども行っていた。しかし、いつの間にかに様々な理由から行わなくなってしまった。もう一度検討する必要があると考えている。また、ギャップがあることについても問題が起きてしまっはいけないが、乗り越えられるギャップは必要であると考えられる。そのためにも交流を通して乗り越えられるギャップにしていく必要がある。

指導の連続性について考えると、「学習支援カルテ」等を使った取組も始まっているようである。様々な問題も考えられるが、IT等を活用して「学習支援カルテ」を効率的に作成できれば大きな力となりうる。

本校における異校種、特に小・中の連携を中心に紹介した。校種の違いについては、文化が違っても言われるように、今まで教員の交流や子供たちの交流が少なかった。交流が少ないことには、相応の理由がありその問題を取り去っていくことが大切である。